

芦川写真集第4回作品前書き

芦川写真集作品の掲載も今回で4回目となりました。作品を通してお伝えしたい芦川の環境や生活文化をご理解いただける頃かと思っています。毎回掲載する10点の作品を区切りとして、共通するメッセージを取り上げて説明してまいりました。

私の撮影活動は既に説明しましたが、芦川にある4集落のうちの中芦川（なかあしがわ）から始まりました。その後、上芦川（かみあしが）、鶯宿（おうしゅく）、新井原（あらいばら）へと展開していきました。中芦川は行政上の中心的な集落で、当時の村役場や交番が置かれていて、小規模のガソリンスタンドや雑貨や燃料を取り扱うお店もありました。

初めて出合った中芦川の住民の方には、村の歴史、自然環境、人口構成から親戚関係まで色々な話を伺いました。お宅でお茶をいただくなど日常的であり、時には宿泊をさせていただいたこともありました。また、その方の行先に同行し、行事や人物写真をフィルムに収めたものでした。こうして段々と他の方に顔を覚えていただく事が可能となったのです。今思い起こすと、集落において私が単独で人物撮影を試みたのであれば、より時間を要したことと感じています。

こうした交流の結果、土門拳文化賞受賞、写真集出版、個展開催へと繋がる作品を収めることができました。お世話になった方々には心から感謝をしています。今回掲載の編集に当たり、改めて作品10点を見た折、当時のことが彷彿と甦り、感謝の念に包まれた心境をお伝えしようと思った次第です。これまでの説明文とは少しばかり異質となりましたが、ご理解いただき4回目10点作品をご高覧いただきましたら幸いです。

写真家 高橋ぎいち



- 1 秋に実をつけた柿は、冬になってもそのままの姿です。誰も取り入れる者がなく雪を被り静かに耐えている空き家の景観です。現在は柿の木が伐採され、家も取り壊され空き地となり、以前の風景は二度と見られなくなっていました。



- 2 茅葺の母屋に進む通路の脇には、手積みの石垣と見事に育った梅の木があります。ここにも先人の知恵を大切に守り続ける芦川人の気質を感じ取ることができます。初夏に梅の木は沢山の実をつけ、これが梅干しとなるのです。



- 3 私が芦川の撮影に入った頃大変お世話になった方の一人です。庭木の剪定作業をしているところに伺いましたが、早速に手を休めお茶を用意してくれました。当時の芦川村消防団長を経験された有志でもあります。画面左下の座布団は、私のために用意してくれたものです。



- 4 ここは新井原（あらいばら）集落です。手前に写るのは芦川（河川の名称）の護岸が、後ろには何段かに亘って石垣が、そしてその背後には林が繋がっています。ここでは徐々に森林が開拓されて石垣に変化してきた歴史を感じ取ることができます。



5 一旦降った雪が未だ消えきれない2月のある日、家を訪ねると本人はこたつに寝そべっていました。撮影のお願いをして外に出てもらうのですが、足が不自由なので電動車に乗って移動することとなります。妻に先立たれこの時既に一人住まいであり、体を移動することは大変な様子でした。



6 一段高くなった畑の奥には弦ものの野菜が栽培されています。ここは芦川の畑の中では少しばかり広いほうです。手前に目を移すとすくすくと育ったあやめが数株咲いていました。こんなところも心の余裕を感じさせてくれる一場面です。



7 ご夫婦で記念写真を撮ることとなり、庭先に出てきました。ご主人はこのところ体調がすぐれず、奥さんが気を使って体を支えるように腕を廻している様子が伺えます。お二人での撮影はめったにないとのことでしたが、私もこのショットが撮れて満足でした。



8 石垣に這いずるうめもどきの姿が美しい。あくまでも石垣にへばりつき平面を保ちながら、まるで自身が構図を創りあげているように感じます。自然の植物に備わったアートのを発見しました。



9 鶯宿（おうしゆく）集落の高台にある本国寺（ほんこくじ）からの展望です。写っている景観は集落の南半分ほどであり、画面右手に北側集落が続いています。芦川四集落の中で一番空き家の多い地域となります。



10 山に囲まれた住居は地平線から陽が昇っても直ぐに陽は差し込んできません。周囲の山から顔を出して始めて恩恵を受けることができます。この家でも窓に陽が射し込み眩しい朝が来るのはこれからなのです。

文 撮影師 [高橋義一](#)（高橋ぎいち）
翻訳编辑 JST 客观日本编辑部